戦没者の家族としての体験と思い　　**掛川市遺族会　名倉　武雄**

私が生まれたのは昭和 16 年 10 月、太平洋戦争開戦の 2 カ月前です。父は昭和 16 年 8 月充員召集、横須賀海兵団に入隊、私が生まれた時、父は開戦の事は知らされないまま、戦艦五州丸の機関兵として（後で分かった任務　南洋隊航空部隊特務隊員、ウエーキ島・ラバウル方面攻略）太平洋を南下していたものと思われます。

その後、昭和 17 年 7 月横須賀に一時寄港、この時初めて父と面会した事になっているが、一歳の子供に何の記憶もありません。父とは後にも先にもこの一度だけの対面でした。

父は、昭和 21 年 1 月オーストラリア軍の捕虜として収容されていたブーゲンビル島で赤痢・マラリヤ等により病死、その事実を 1 年後の昭和 22 年に町役場から知らされました。

遺骨はなく、白木の箱だけで帰ってきました。

その後、葬儀の香典帳の最終頁に母の思いが記されています。

父　死せし時　長男　武雄　6 歳　長女　英子　8 歳　妻　初江　30 歳

「葬儀する　妻の心は一つじに　吾も一所に　夫と行きたく」

「吾子二人　如何なる事が有らう共　吾身にかへて　守り通さん」

私の戦争前後の記憶

＊終戦間近に、アメリカ軍が浜松市街に向け艦砲射撃を行い、空まで真っ赤に染まり、怖かった。

＊西の空からＢ29 が大きな翼を広げ、上空から自分を睨み付ける様な威嚇した飛行編隊が続いた。

＊食糧難で芋・麦・南瓜を混ぜたご飯、雑炊等が主食で、子供たちの中には弁当を持って行く事が出来ない子供もいた。

＊学校の空き地を利用して芋を植え、自分たちの大・小便を肥料にして育て、皆で食糧の足しにした。

＊大型の台風が来て、高波が海岸近くの芋畑を直撃、すぐに掘り出さないと食料に使えなくなるので、授業を打ち切り子供たち全員で芋ほり作業を手伝った。

＊都会に住んでいた人たちは戦火を逃れ、私達の町にも多くの人たちが親戚を頼り、やって来た、空き家は少ないので、牛舎・豚舎・鶏小屋等屋根があればどこにでも住んだが、戦後復興が進むと元の住居に戻って行った（学校は１クラス 50 人以上のすし詰め状態だった）。

＊兵隊帰りの先生の中には、云うことを聞かない子供に素手のビンタだけでなく、スリッパやベルトを使った躾もあった。
＊衛生環境が悪く、ノミ・シラミが発生、学校でＤＤＴを頭から振りかけられた。
＊叔父が中学に通う時、駅でチンピラに会い、弁当を取られた。チンピラは弁当を半分食べると「残りはおまえの分だ」と返してよこした。

以上、昔の思い出を羅列しましたが、語り部の材料になる事が有れば幸いです。